



# いれずみ物語

—28—

小野 友道

## 梅のいれずみ

—— 篤志解剖第一号 遊女美幾 ——

明治2年8月13日、医学校の敷地内に人目を避けるため竹籬で周りを囲い、さらに幕を張り巡らせた仮小屋で一体の解剖が行われようとしていた。吉村 昭の『梅の刺青』からその場面を再現する。

「定刻前に、医学校の教授をはじめ多くの医師や医学徒たちが緊張した面持ちで小屋の周辺に集まってきていた。その中には、英才の名の高い長谷川 泰や石黒忠恵の姿もあった。中略 布が生徒たちの手で取りのぞかれ、梅毒院支給の病衣を身につけたみきの遺体が現れた。塩は取りのぞかれていた。中略 遺体を見つめる医師たちは、みきの片腕に思いがけぬものがあるのに視線を据えた。それは刺青で、梅の花が数輪ついた枝に短冊が少しひるがえるようにむすばれている。短冊には男の名の下に「…様命」と記されている」

この解剖執刀者は医学校生徒の田口和美、のちに東京帝国大学の初代解剖学教授に就任し（明治10年）、本邦初の体系的解剖学書『人体解剖攬要』全13巻を著した人物である。遺体は吉原の遊女美幾34歳であった。この解剖こ

そが日本の篤志解剖第一号であり、美幾の名は永久に残ることになった。

『皇国医事大年表』（昭和17年発刊）に、「八月 医学校、学術研究ノタメ屍体解剖ノ要ヲ陳べ入院患者中死後解剖ヲ願出ヅル者アル時ハ解剖試験ヲ許可サレンコトヲ政府ニ乞フ、官之ヲ許シ且解剖後厚ク弔フベキ事ヲ命ズ、茲ニ於テ医学校ノ第一ニ解剖ニ附シタルハ駒込追分町彦四郎娘みきニシテ解剖後小石川倉建寺ニ葬リ碑陰ニ一文ヲ刻シ我邦特志解剖ノ嚆矢ヲ記念ス」とある。

その美幾のお墓は今も文京区白山の念速寺裏手墓地にある。碑面に「美幾女の墓」とある。墓石の裏には「駒込追分販夫彦四郎女名美幾 患微症属不治 遂入病院乞治 已而病革 遺言解視其体以覈医理 因鳴之官得充焉 竟死年三十四 乃如其言則於其内景 果有大 所發明矣 是為本邦剖検病屍之始 官乃嘉其志賜資葬之礫川念速寺 為誌以伝焉 明治己巳秋八月 医学校教官 同主簿記」とあり、解剖後手厚く葬られたことがうかがわれ、戒名「釈妙倅信女」も与えられている。墓石の文面から、美幾は微症、



篤志解剖第一号 美幾女の墓  
(文京区指定史跡) (1835～1869)

美幾女(みき)は、江戸時代末期の人。駒込追分の彦四郎の娘といわれる。美幾女は、病重く死を予期して、死後の屍体解剖の勧めに応じ、明治2年(1869)8月12日、34歳で没した。死後、直ちに解剖が行われ、美幾女の志は達せられた。当時の社会通念、道徳観などから、自ら屍体を提供することの難しい時代にあって、美幾女の志は、特志解剖第一号として、わが国の医学研究の進展に大きな貢献をした。墓石の裏面には、“わが国病屍解剖の始めその志を嘉賞する”と、美幾女の解剖に当たった当時の医学校教官の銘が刻まれている。

浄土真宗大谷派 念速寺 文京区白山2-9-12

(筆者撮影)

すなわち梅毒を患い、それで死んだことがわかる。遊女が梅毒で死んだ。そしてその腕には馴染み客のいれずみがあった。それ自体、その時代なら驚くことではなかったはずである。江戸から明治にかけて梅毒はすこぶる蔓延していた。元治元年、松本良順の著した『養生法』に「下賤のもの百人の中、九十五人は梅毒にかからざるものなし。是その源花街売色に制なき故也」とあり、それは花柳界の仕業とされた。特に横浜は英国軍隊の兵士たちに梅毒が多く見られ、駐日英国公使館付医官ウイリスの建言を受けて英国公使パークスが幕府にその予防対策を講じることを命じた。まず横浜に梅毒病院が設けられ、英国海軍軍医ニュートンが遊女の検診を始めた。前述の『皇国医事大年表』に「横浜梅毒病院長ニュートンノ覚書ニヨレバ一月現在横浜港遊廓遊女総数七百五十名、検徴延人員三千八十四名、入院患者一日平均八十名、マタ同遊廓遊女ノ徴毒罹患率ハ慶応三年以前ニハ八

十%アリシモノガ検徴制度実施後ノ明治元年ニハ五一%同二年ニハ三六%ニ激減セリト」とある。激減とはあるが、なお、すさまじい状態であった。それは美幾の吉原においても同じような状態であろうことは容易に推察される。梅毒で死ぬ遊女は多く、屍体は菰に包まれ女郎塚に投げ込まれるというのが、多くの遊女の末路であった。

さて、美幾の腕にはいれずみがあった。これも遊女の間ではやった心中立のひとつである。なじみ深くなった客に、遊女の真情を示す手段の一つが起請彫である。吉村 昭は、美幾の解剖に立ち会った石黒忠恵の日記を見る機会を得、そこに美幾の腕に梅の小枝のいれずみがあったとの記載を確かめている。

\*

梅のいれずみは、玉林によると江戸時代の図柄の選択のうちのひとつで、植物として列記されている中に、牡丹・桜・朝顔・紅葉・菊・鳶・

海棠・桃とともに梅もあげられている。梅は遠い昔、中国からやってきた。いみじくも梅の一枝といれずみにまつわる話が中国にある。「西暦五世紀の頃、江南地方で暮らしていた陸凱という詩人が、長安（現在の西安）にいる友人の范曄のために、荷物を運ぶ駄使に託して一枝の梅を送り、詩を書き添えました。その詩のなかに「いささか贈る一枝の春」という句があったので、それ以後、＜一枝の春＞は梅の花を意味する言葉として使われるようになった」という話である。また一方、それより以前、「越の国の諸発という使者が、黄河の中流にある梁の国王をたずねるさい、一枝の梅を贈り物として持参しました。すると、梁王の臣下の韓子という者が、＜たった一枝の梅を君主に贈る者があるだろうか＞といきり立ち、＜冠を着けなければ、王との謁見を許すわけにはいかない＞と諸発に告げました。諸発はこれに答えて、＜わが国は海にのぞんだ僻地にありますが、ほかの国とおなじく天子から与えられた土地です。水中でミズチ（蛟竜）に対抗するために、髪を短く切って体に入れ墨をしています。だからといって、あなたの国の使者がわが国に来た時に、髪を短く切って体に入れ墨をしなければ謁見はできないと言ったら、どうしますか＞とのべたので、梁王はようやく謁見を許しました」という二つの話（飯倉照平：『中国の花物語』より）がある。1964年、中華民国はこの梅の花を国花と定めた。そう、梅は四君子（竹、梅、菊、蘭）の一つであり、松竹梅でも知られるめでたい花である。

ちなみに梅毒は黴毒とも書くが、今は前者が一般的である。この病気、その名から何やら梅との関係を思わしめる。事実、江戸の川柳に「しやう売をしたお八重は鼻にかけ」というのがある。お八重は八重の梅の花、すなわち梅毒患者、鼻にかけは、{|はなにかける|}梅毒で鼻

が欠けた{|}を懸けている。しかし、実のところ梅と梅毒は無関係である。梅毒は中国から楊梅瘡という名で日本に伝わり、その名が日本語読みで用いられてきた。楊梅とはヤマモモのことである。そのぶつぶつとした暗赤色の熟した実が梅毒の皮膚の症状に似ているというわけで、中国でその名が病名として附せられた。江戸時代、この楊梅の楊が省略され、梅瘡そして梅毒となったのである。

ところで、美幾の梅の花が刺青の青い色だったか、線彫で白梅が表現されていたのか、はたまた赤い色素で彩られた紅梅だったのか。花柳界のあでやかさ、派手さ、あるいは花札などから、筆者には紅梅が思い浮かぶ。しかし一方で、篤志解剖遺体として、解剖台に横たわった美幾の尊い姿を思い浮かべると、石田波郷の詠んだ「梅も一枝死者の仰臥の正しさよ」の句が重なり、それはきっと白梅でなければならない。

20歳で年増、25を過ぎると大年増といわれた遊女たちである。美幾の場合、34歳の梅毒病みが死んだ。それだけのはずであった。しかし、その名は献体という尊い行いゆえに残ったのである。

＊

「白菊会」をご存じだろうか。各大学の医学部などに事務局がある篤志献体協会に属する組織である。「自分の死後、遺体を医学・歯学の教育と研究のために役立てたい」と志した人が、生前から献体したい大学またはこれに関連した団体に名前を登録しておき、亡くなられた時、遺族あるいは関係者がその遺志にしたがって遺体を大学に提供するのである。現在その登録者数は20万人を超えている。その昔、筆者も解剖実習で、ご遺体にお世話になった。ご遺体に向き合い、メスを皮膚に当てたその瞬間、人の身体を持つ尊厳さに身震いし、そして解剖が進み、つぎつぎと眼前に臓器が顕れ、生物と

してのヒトの造形の神秘さを目の当たりにした時、自分は今まさに、医学を始めたのだという実感、畏れを抱いたことを忘れるものではない。

大宝律令の昔から、わが国において人の解剖は禁じられてきた。ご存じ、山脇東洋が最初の人体解剖（腑分け）を為したのは宝暦4年であった。その後少数ながら解剖が行われ、あの杉田玄白・前野良澤らが、手に『ターヘル・アナトミア』を携えて腑分けを観察したのが明和8年であった。「その日の刑屍は、五十ばかりの老婦にて、大罪を犯せし者のよし。もと京都生まれにて、あだ名を青茶婆（あおちゃばば）と呼ばれしものとぞ」と杉田玄白が記したその女囚の屍体を観察し、「良澤と相ともに携え行きし和蘭図に聊か違ふことなき品々なり。中略刑場に野ざらしになりし骨どもを拾ひとりて、かずかず見しに、これまた旧説とは相違にして、たゞ和蘭図に差へるところなきに、みな人驚嘆せるのみなり」と、玄白は『蘭学事始』で回想した。この驚きが、彼らをして『ターヘル・アナトミア』の翻訳に挑戦させ『解體新書』が生まれたのである。

それ以後、解剖の重要性は認識されてはきたが、明治に入っても医学校ではなかなか解剖の機会を得られなかったという。明治元年、宇都宮鉦之進なる人物が、自分の「死後解体の儀」を受け入れるようとの願い書を提出した。全身の関節症状で苦しんでいた彼は、その身体を後進のために捧げようとの遺志であった。これまでの日本では想像もしない申し出であり、その受け入れをどうすべきが大騒ぎになった。このいきさつ、そして宇都宮なる人物についても吉村 昭の『梅の刺青』に詳しい。ともかく献体願いは受け入れられたが、彼の病は快方に向かい、願いは自然消滅の形となり、明治35年、69歳で死亡したが、解剖は実施されなかった。宇都宮は化学研究者の泰斗で、「化学」なる用語は

彼が作ったとある。引き続き、解剖の機会を探していた医学校側は、梅毒院の患者に解剖を願ひ出るものを探した。再び『梅の刺青』を捲ると「医学校の医師は、息を喘がせているみきを婉曲に説得した。死をまぬがれぬ者として、これまで無料で治療をつづけていた医学校の恩義にむくいるためにも、医学の進歩をうながす死後の解剖を受け容れるように、と情理をつくして説いた。口をつぐんでいたみきの心を動かししたのは、厚く弔うという医師の言葉であった。遊女は、死ぬと投込寺の穴に遺棄されるのが半ば習いとされていて、その霊はむなしくさ迷うと言われている。医師は、解剖後、丁重に葬儀をとりおこない、戒名もつけてしかるべき寺の墓地に埋葬し、墓も建ててやる、と説いた。みきは、死後安息を得られるのを知り、医師の説得を受け容れた」

かくして、美幾は日本最初の篤志解剖者となったのである。

美幾の話は渡辺淳一の『白き旅立ち』にも見事に物語られ、そこにはいれずみの話、さらに客として現れた一人の武士との愛が描かれているが、その相手があの解剖を願ひ出た宇都宮鉦之進であり、美幾が彼の影響で献体を願ひ出る筋書きとなっている。また、美幾の死を梅毒でなく結核と想定している。一気に読ませる迫力と、医師である作者の解剖への思いが伝わるが、加えて上田三四二の解説がこの小説の魅力をさらなるものにしている。

（熊本保健科学大学・学長）

## 文献

- 飯倉照平：『中国の花物語』，集英社，2002.
- 小野友道：いれずみ物語7 入ればくろ 客と遊女の駆け引き―心中立，大塚葉報，No. 618, 2006.
- 刈谷春郎：『江戸の性病』，三一書房，1993.
- 斎藤正二：『植物と日本文化』，八坂書房，2002.
- 杉田玄白著・緒方富雄校註：『蘭学事始』，岩波書店，1959.
- 玉林 繁：『文身百姿』（第5版），日本刺青研究所，1987.
- 吉村 昭：『島抜け』，新潮社，2000.
- 渡辺淳一：『白き旅立ち』，新潮社，1979.